

綱布学園講演会

「トラウマを受けた子どもとどうかかわるか。LSWなどの役割」

日時：2013年10月23日（水）

9:30～12:30

場所：児童養護施設 綱布学園

講師：パトリック・トムリンソン氏

通訳：辻 直美（吉香 k.k）.

司会：中西政人

記録編集：岸江美佐・開原久代

配布資料：「トラウマを背負った子どもたちと心を通わせるには」(Tomlinson 氏作成・開原久代訳)

春日園長：おはようございます。昨年に引き続いて、トムリンソン先生の講演会を開催したいと思います。先生は、イギリス、アメリカ、オーストラリアと3カ国で活動されているということで、虐待、被虐待の子どもたちというのが、大切に育てられないといけなにもかかわらず、社会のなかで虐待を受けている子どもたちというのが、たくさんいるということを実感しながら、それを回復する、大人になるためにどう回復していくのかということの取り組みをされているトムリンソン先生のお話を、これからじっくりと学びたいと思っています。昨年は時間が短かったのですが、今年は時間をたくさん取りまして、学習ができればと思っています。よろしくお願いいたします。

開原久代：おはようございます。科研費研究の代表を務めております開原ですが、こちらの春日園長さんに研究協力者になって

いただいています。昨年ご紹介いたしましたが、本年も、トムリンソン先生に来日いただき講演をお願いすることができ嬉しく思っております。昨日5時頃成田に着かれまして、いろいろ打ち合わせをしまして、オーストラリアの英語圏のところでは4時間に及ぶ講演をやっておられました。そのときは、みんな英語がわかる人たちだから、それが出来たけれど、日本では、通訳さんに半分の時間を割くので、半分しか講義ができないのがすごく残念だとおっしゃっていました。日本の参加者は、ポイントを聞けば、あとはマニュアルで勉強してちゃんと理解するからと伝えてありますので、よろしく願いいたします。今日は、重要なお話なので、どんどん質問していただきたいと思います。質問があると元気が出られるようなので、よろしくお願いいたします。



トムリンソン：おはようございます。本年、再度お招きいただきまして、ありがとうございます。ちょうど昨年も今ごろであったかと思いますが、改めまして、今回もご招待いただいたことに感謝申し上げます。

本日は、3時間というお時間をいただいて、トラウマを受けた子どもたちのケアということでお話をさせていただきます。プレゼンテーションで最初の部分、1時間半

ほどお話をして、その後に休憩を挟みまして、ご質問があれば質疑応答をして、またお話を続けていきたいと思えます。



今日は主に、トラウマを背負った子どもたちとどうコミュニケーションをとっていくのか、虐待を受けた子どもたちもしくは、ネグレクトというのも非常にトラウマを負わせる原因になっているので、そういった子どもたちとどういうふうに向き合っていけばいいのかというお話を主にしたいと思います。

1. The Impact of Trauma on Child Development 子どもの発達に及ぼすトラウマの衝撃

トラウマは心のショックのようなもので、その体験は、人が処理するにはあまりに抗いがたいものである。

小児期には、トラウマはよりわけ破壊的である。というのは、子どもの脳は十分発達していないので、自然な発達過程が壊されたり、歪められたりするものである。

トラウマは、脳の機能も変え、実際、人が脅威から恐れるために備えている生き残り反応であるアドレナリンやコルチソールのような化学物質が過剰に生産されているのである。

トラウマは、しばしば、身体的、心理的、性的虐待やネグレクトのような様々な異なる形で長期にわたって繰り返され、複雑なトラウマを形成している。

まず、トラウマです。これが虐待であれ、ネグレクトであれ、トラウマ的な経験をした子どもは、それが初期の段階で起これば起こるほど、子どもの脳の発達に与える影響が大きくなってしまいます。例えば、実年齢が12歳の子どもであっても、脳の発達にトラウマが影響することによって、その発達が妨げられてしまい、実際の情緒的な発達が、5歳程度に留まっている可能性があります。特に難しい点は、そういった子どもたちとコミュニケーションを取るときにどういうやり方が最善なのかというこ

とが大変難しい作業になってきます。例えば、普通に皆さんとお話をするときには、私が何を言わんとしているのかということ、皆さんのほうで理解していただけると思いますが、そこまで考える能力のない子どもと向き合っていくときに、本当に一番いいアプローチということをとらえるのが非常に困難になってきます。皆さんがケアされているお子さんのなかには、そういうコミュニケーションを取る術を阻止しようとする行動に出てくる子どももいるかもしれません。例えば、黙って、静かで、本当に引きこもっているようなタイプの子どももいるかと思えますし、逆に非常に攻撃的な、敵対的な態度を取る子どももいるかもしれません。

それでは、5番に進んでゆきたいと思えます。子どもたちが、安全であると感じてもらえる環境を整えるのは基本的なことなのですが、子どもによっては、それすらも非常に難しい場合があります。安全だと感じてもらえるまでに半年~1年ぐらいかかってしまう場合があります。もちろん、物理的な危険から身を守るという意味での安全もありますが、それ以外に、感情的に、世話をしてくれている人を信頼していいのだ、安心して任せられる人なのだと感じるという意味での安全もあります。

5. Boundaries 境界線

安全とは、堅固であるが懲罰的でない境界線を持ち、信頼でき、一貫していることにより生み出される。
子どもは攻撃的で、著しく挑戦的になることにより、彼を拒否したり罰したりするように我々を仕向けるか、挑発しようとしているかも知れない。

このことには、子どもと関係者が安全であることを保証するために確固とした明確な手順で応じる必要がある。

明確な境界線と期待は、処罰的ではなく子どもへの共感をもつやり方に変えることが出来る。
子どもを傷つけたり罰したりしないで安全を保つことは、彼が安全と感じるために重要なことである。

それでは、ここまでのところで、何かご質問のある方いらっしゃいますか？よろしいでしょうか？

ここで、皆さんに質問させていただきたいのですが、今対応されているお子さんたちのなかで非常にやりづらいいいいますか、非常に敵対的、攻撃的な態度を示すようなお子さんのお世話をされているという方がいらっしゃいましたら、挙手をお願いします。（挙手多数）

こういう難しい子どもたちの世話をしていると、ときに、皆さん自身、世話をされている方ご自身が怒りを感じたり、挑発的な態度に出してしまうこともあるかと思いません。子どもたちのほうで、やりにくくするためにあえて仕向けるような、そういう反応を引き出そうとする行動に出る場合があります。

もうひとつ質問なのですが、ちょっとこの子は苦手だなとか、この子はどうしても好きになれないなというお子さんはいらっしゃいますか？（挙手あり）

ありがとうございます。

そういうふうに、ちょっと苦手意識のあるお子さんであれば、特に対応が難しい場面があるかと思えます。そうすると、どうしても不信感につながってしまいます。ここで重要なのは、こういう行動を取ったときに、その行動自体を、やめて欲しいとか、私はそういうことは気に入らないということ伝えていきたいのです。子どもそのものを否定するのではなくて、その子どもは受け入れているのですけれども、ある特定の行動を取って欲しくない、その行動に焦点を当てて、そういったことはやめて欲しいと言っていたいただければと思います。そ

こに明快な境界線を引いていただきたいと思います。次、8に進みます。

8. Creating a Therapeutic Home Environment
治療的ホーム環境をつくる

我々の子どもとの直接の交流と同じように、家の中で我々が行う凡てが破らとのメッセージ交流となる。

日常生活の細かいこと凡てが治療的機会である。

子どもは、ここは自分のための家で、自分のニーズが優先的に与えられ、物事をどうするかを自分が言うところであることを理解する必要がある。

日常生活の単純なことが重要となることができる。たとえば

- 子どもたちが自分の所持品を自分の個人スペースに保管することが許される
- 我々がどうホームの世話をしているか
- 基本的なニーズの料理、掃除、洗濯の世話の我々の引き継ぎ
- 玩具や本やその他の子どもが利用できる関連する資源
- どう大人たちが尊敬と親切と思いやりを示しながら一緒に働いているか—これら凡てが子どもには全く異質であるかも知れないのである

子どもとのコミュニケーションというのは、単にすべて言葉を通じての、言語を介してのコミュニケーションだけではなくて、その子全体の世話の仕方だったり、生活すべてがコミュニケーションの取り方に関わってくるのとらえております。言葉で何を子どもに伝えるかということだけではなくて、いろんな行動を通じて、もしくはホームの状態だったり環境だったりということがすべて子どもにとってのメッセージになってきます。例えば、私、日本語を話せませんけれども、言葉の壁はあるにせよ、このように、こちらに伺ったときも、皆さまから笑顔で歓迎の意を示していただいたり、Welcome Mr. Patrick という絵を貼っていただいたり、お茶をいただいたり、そういった、ひとつひとつが、私にとって、大変歓迎していただけているのだなということを感じるような行動を取っていただいたことです。それは、やはりコミュニケーションのひとつの取り方だと思えますので、子どもにとっても同じように、どんな些細なことでもいいのですが、それを伝えるコミュニケーションは言葉以外にもできると思えます。

また、施設でも里親家庭でも、日常生活の中でいろんな話をする機会があるかと思

いますけれども、そういった日常の機会を利用したワークというものが大事です。

それでは、10に行きます。

10. Case Example 事例

私が体験した事例は、朝、我々が子どもたちを学校に行かせる準備をしている時のことでした。

少年たちの一人が朝食を終えるのが遅かったので私が彼に急ぐように言いました。彼はすぐ、大変不安になり、コントロールできない程のパニック状態になったのです。

彼の成育歴を調べて分かったことは、彼の母親が一度、朝食を食べるように促した時、彼が拒否したので、母親は彼の頭を杖で激しく殴り、彼は病院に連れてゆかれることになったことがありました。

それで私たちは、彼と朝食をめぐる悲惨な、トラウマの記憶を一緒に話し合うことが出来たのです。

子どもたちは、往々にして、言葉を通じて何かを伝えるのではなくて、行動によってコミュニケーションを取ることがあります。子どもによっては、就寝時に不安がる子どももいるかと思えますし、また、子どもによっては、朝、起きるときに、また、食事のときに、落ち着かなくなったり、心配したりしているような状況になることもあります。ここで、我々が考えなくてはいけないのは、子どもの行動をコントロールしようとするだけではなくて、どうしてそういう行動を取ってしまうのかということをしかり考えるということです。この行動によって、我々に何を示そうとしているのかということ、まず理解する。子どもの成育歴を含めて考慮することが重要です。

11に行きます。

11. The Daily Routine and Regulating Emotions 日課と感情の調整

まず最初は、深いレベルのコミュニケーションに多くの関心をおくより、以下のような基本的な事柄に焦点をあてるべきである。

- 毎日、どんなことが起こるか子どもに知らせること
- 日課はどうすればよいか
- 一緒に生活することのすべての面をめぐる期待
- 何時に食事、就寝、その他の日常の出来事がおこなわれるか
- 今日誰が面倒をみてくれるのか、そしてその他のことでその日に行われること

トラウマを受けた子どもたちは予期しないことが起こることに大変用心深い。だから何が期待できるか知れば知るほどいいのである。信頼できる日課とコミュニケーションは彼らの不安を減らし、感情の調整をする能力の改善に役立つ

できる限りシンプルにお伝えしようと思

いますけれども、子どもたちがまず安全だと感じてもらえるような環境を整えるということ、もちろん、言葉を使ったコミュニケーションも重要ですが、日常生活のなかでルーチン的に繰り返し起こるようなこと、これを明らかに子どもが理解できるような形で、どういう日課になっているかということを確認してあげるということが非常に重要になってきます。多くの場合、施設で養護を受けている子どもたちは、発達がある段階で妨げられている可能性が高いということで、機能的なレベルで、実年齢に対して非常に若い場合があります。ですから、ある程度、年のいっている子どもであっても、幼児のような振る舞いをするということもありますので、それぞれの子どもの対して、非常にシンプルなことでも結構です。たとえば、夕食は何を用意しているのかとか。子どもたちの不安を取り除いてあげられるような形で説明したり、何を期待すればいいのかを明確にしてあげることが重要になります。

子どもとのコミュニケーションを改善したいと思われるのであれば、まずは、大人同士のコミュニケーションをしかり取っていくことが重要になってきます。ケアをされている方、職員の方が、円滑なコミュニケーションをまず取ってよく話し合うこと、そして一緒に考えていくという、大人同士のコミュニケーションが第一ということになります。

14に進みます。ここまでのところ、よろしいでしょうか？ご質問等ございませんか？すべての行動に意味があるという概念自体、皆さん、なじみのある概念でしょうか？

14. All Behaviour has Meaning
 全ての行動には意味がある

全ての行動は意味を持ち、コミュニケーションの形として考えることが出来る。
 乳幼児は言葉を使わずに何を感じ、何を必要としているかを我々に知らせる。
 幼児に自分の気持ちや必要を考えはじめさせ、伝えるために言葉をつけることが可能にするのは唯一、親による幼児の行動への質問と信頼の対応があるからである。
 “子どもたちは考えてもらうことにより考えることを学ぶということ；幼児が自分のことを本音で、学友の前で話したその瞬間から他人の心に出会って実現するというのは殆ど自明のことである。
 (マルゴワデル (Margot Waddell 2004, p.22, Child and Adolescent Psychotherapist))

子どもたちのコミュニケーションは、先ほど話したように、ただ言葉を使って話すだけではなくて、いろんな行動を通じてメッセージを送り続けるという非常に重要なコミュニケーションの形態をとっているということです。子どもたちの声に耳を傾け、子どものことを考えてあげるというすべてがメッセージになってきます。

次、16番に行きます。

16. Helpful Approaches to a Traumatized Child
 ト라우マを背負う子どもへの役に立つ対応

ファンデコルクとニューマン (Van der Kolk and Herman 2007, p.18) はトラウマに関連した事柄を時期尚早に話す気持はただ物事を悪くするだけかも知れないと指摘している。最も役立つ対応は下記のことを含む。

- ストレスの軽減-規則正しい食事、睡眠、信頼の信頼できる健康的習慣を奨励することは、全般的な健康とストレスからの解放にも大切である。
- あまり押し付けや個人的でない養育とケアを提供する。子どもは大人の身体的接近に非常に不安になるかもしれないからである。
- 一日にわたる物事を明快に説明する-子どもにあとから何が起るかを思い出させて不安にさせるのを防ぐため。
- 子どもに話を聞いて、言語的、非言語的、非verbally いずれでも彼の伝達を注意深く聞く。
- 子どもが何が好きか、何を必要としているのか、彼にとって大事なことは何か等、子どもの健康的な興味を示すこと。
- 言葉などから出来たトラウマを背負う子どもたちには、なんらかのコントロールの感覚をもつことは大変重要である。
- 子どもが自分のトラウマの記憶を思い出さない、現在、正常な面づくりに専念することを奨励すること。トラウマは子どもの子ども時代を奪うことが出来るというわけてきた一握りの子どもの子ども時代を奪うようにする必要もある。


トラウマについて研究されてきた方々の報告を見ますと、子どもたちとトラウマに関する話を、あまり時期尚早にやってしまうと、逆に事態が悪化してしまうという結果が出ています。できる限り子どもに注意を傾けて、子どもの声を聞いてあげる、そして、この行動によって、何を彼は言わんとしているのかを理解しようとする、そういった手順を非常に重要視していただきたいと思います。例えば、直接的でなかったとしても、「今のことはどういう意味だったの?」とか、「どうして、今日はご機嫌なの?」

とか、あまり子どもが脅威を感じないような形での声掛けをしてあげるといことも重要かと思えます。施設に入所する子どもたちの多くは、自分たちの手でコントロールできないような経験をしてきていると思いますし、虐待を受けたり、非常に痛みを伴うような体験をしてきている、若しくは親に見捨てられたりというような、恐怖体験をしている子どもたちも多いと思いますので、その多くの事象は子どもたちにコントロールできないものである。可能な限り、子どもたちにコントロールできるような状況を与えてあげることも大変役に立つかと思えます。例えば、可能な範囲で選択肢を与えてあげる、そして、自ら選ぶことができるという状況を作ってあげるといことです。リサーチの結果、こういった形で、子どもたちを助けることができるかという、選択肢を与えられると、自分たちの言うことに耳を傾けてくれているということになり、大変役に立つという結果が出ています。家族との関係といった大きな事柄から、今日何を食べるのかという食事に関する小さな話題でも結構ですが、自分たちの声に耳を傾けてもらえている、選択肢があるということが、子どもの回復への支えになるということがわかってきました。こういう難しい子どもたちを相手にしていると、往々にして我々も忘れてしまいがちなことは、ほかの子どもたち、普通の子どもたちと同じような経験をすることが、ケアを受けている子どもたちにも必要だということを見落としてしまうことです。普通の子ども時代を過ごさせてあげる必要性といったものを、往々にして我々は、日常生活の困難に直面していると、そこにすべて

神経が行ってしまっていてそういった子どもたちが何を必要としているのか、普通の子ども体験をさせてあげるといふことの重要性を忘れてしまいがちになるのです。

17にすすみます。

17. Physical Mastery and a Sense of Normalcy 1
身体統御力と正常さの感覚



トラウマを背負った子どもたちはしばしば自分たちは他の子どもたちとは違っているという烙印を押されているように感じている。彼らは凡ての子どもたちのように正常で普通のことをする「正常さの感覚」(Anglin, 2002)が必要である。


たとえばもし彼らが虐待されてきたとすると、彼らは子どもが経験すべきでない何か異常なことを経験したことになる。

トラウマ体験は自分は誰かという子どもの感覚を支配するので、彼らにはもっとバランスのとれた健康的アイデンティティを創り出すために普通の経験が必要なのである。

こちらは、カナダのアングリン氏の研究ですが、回復力を高めるため、resilienceを高めるための活動として、普通の生活、例えばゲームをしたり、スポーツを楽しんだり、趣味を楽しんだり、といったような正常な感覚を取り戻すと生活が非常に重要だということを語っています。つまり、子どもたちのアイデンティティが、トラウマを受けた子どもたちだというだけではなく、ほかの経験を通じての正常な感覚を持ってもらい、例えば、サッカーが好きだとか、こういったことをするのが好きだと。単に親から虐待を受けた、施設に入れられた可哀そうな子どもだというアイデンティティではなくて、ほかの体験を通じての自らのアイデンティティを築いてもらうことです。そういった普通の感覚を持ってもらうということが重要なのです。ここに、私も世話をしたことのあるイギリスの子どもの写真が出ておりますが、非常にサッカーが好きで、天気によければ、毎日でもサッカーをしていた子でした。こういう体を動かす物理的に運動をするということが、脳にも非常にいい働きかけをし、ストレス

を軽減することができる化学物質を生み出します。では、19のスライドに行きます。

19. Communication through our Actions
我々の行動を通してのコミュニケーション



我々は行動を通して子どもたちにメッセージを伝えている。我々自身は世話をしていること、我々は彼らのことを気遣っていること、彼らは価値があることを。

我々が繰り返し行っている何百もの小さな会話が、次第に子どもたちに信頼を育ませるのを可能にしている。

“いかに習慣と繰り返しが行って回復に重要かは論議してもよし尽せない。脳回路と繰り返しの経験に反応して変化する：あなたが何かを沢山繰り返すほど、より深くそれは染み込んでゆく。(Perry and Szalavitz, 2006, p.245).”

こちらが、ブルース・D・ペリーさんで、アメリカで脳の発達に関する研究を行っている研究者です。

たとえば幼児の発達過程を考えますと、3歳ぐらいまでは、毎日同じようなことの繰り返しをしています。ですから、子どもと対峙するに当たって、同じことの繰り返しというものを経験させてあげて、それが一貫性を持った形で繰り返されるといふ経験も重要になってきます。子どもとしても、何を期待すればいいのかということが予めわかっている、何が起こるのかが想定できることを繰り返させてあげることです。

次、20番に行きます。

20. Getting Better can Make Things Worse
よくなることは物事を悪くする

我々は子どもが我々の努力を必ず受け入れてくれることを期待することは出来ない。しばしば全く反対になるからである。

我々はそのことが間違っていて失敗したように感じるかも知れない、まさに絶望的状況で時間の無駄だったと。時々、物事が正しくなっているように見える時、悪くなっているのである。

トラウマからの回復は大変なことで、2歩前進し1歩後退、または2歩後退し1歩前進なのである！


ほんの小さな進歩があるように見えるまでに、長い期間、何か月も時に何年もかかるのである。

トラウマを背負う子どもには、小さなステップの前進でも大きな跳躍に相当するのである。

これは、皆さんのなかでもご経験のある方が多いかと思いますが、ほんの少しの進歩を見るために長い時間を要するということは、我々のような仕事をしていると往々にしてありがちです。やっと一歩前に進めたなと思いきや、また一歩後退する、非常

に一進一退の状況がよくあるかと思えます。
では、21のスライドに行きます。

21. Patience, Understanding and Survival
忍耐、理解そして生き残ること



我々は忍耐と、続けて試みることで、なぜ物事がこんなに難しいかを理解する必要があり、時々我々は理解することが出来ないかも知れない。

私のキャリアの初期のころ、圧倒され無力を感じ、もうだめだと思った時、私たちのコンサルタント、バーバラ・ドッカー・ドライデールは、「時には生き残ることが私たちが出来る最も重要なことなのだ」と私に言いました。もし我々が生き残り次の日もそこにまだいれば、我々が想像するより子どもたちにより重要となる事が出来るのだと。

こちらの写真の女性が、私が初めて仕事に就いたときに支えてくれた方で、バーバラ・ドッカー・ドライデール氏です。30年ほど前にいろいろとサポートいただいた方です。初めて、こういったトラウマを受けた子どもたちとの仕事をはじめたときに、どういう対応をすればいいのかという理論的なものは知っていたのですが、しばらくその仕事を続けた後に、やるべきことというのは本当に基本的なことなのだということに気付いたわけなのですが、当時、私は本当に仕事に疲れ果てておりまして、本当に疲労困憊という状況だったのです。そのときに、このバーバラさんがおっしゃったのは、ときには、我々ができる最も重要なことというのは、サバイバルだと。特に、そこに生き残っていることが一番重要なことだという言葉いただきました。

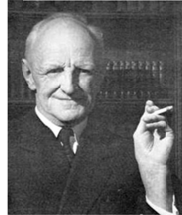
去年、ここにおられた方もいらっしゃるかと思います。1年経ってここにいらっしゃるということは、去年から1年間生き残られた、surviveされたということで、本当におめでとうございます(笑)。非常にシンプルなことではありますが、子どもたちが、これだけいろんな体験をしてきて、困難な状況にあったなかで今いる環境で、ずっと子どもたちと一緒に世話をしてくれ

る人たちのもとで、日々過ごすことができるということ、後になって子どもたちが振り返る機会が出てくるかと思えます。

皆さまのお仕事のなかで、重要なことのひとつとして考えられるのはお互いを支え合うということです。去年いらした方のなかにも、もしかしたら今年はいない、離職された方もいらっしゃるかもしれませんが、やはり、職員の方同士で、お互いに困難な状況に取り組んで、そこをお互い支え合うということが非常に重要な職務のひとつではないかと思えます。

それでは、23のスライドに行きます。

23. Squiggle Game
なぐり描きのゲーム



もし子どもがお絵かきが好きなら、我々はお絵かきゲームをする。英国の子どもの精神分析家のウイニコット (Winnicott, 1971) は、彼が「なぐり描き」と名付けていたゲームで子どもたちと遊ぶのが常だった。

彼と子どもはかわりばんこになぐり描きをやり、片方がなぐり描きを何かの絵に変えてゆくのである。

しばしば子どもが描こうとしたものが、子どものことを沢山伝えてくれる。ウイニコットはこれを彼が会っている子どもの理解に役立てるよう使った。それは、また、子どもが引き込まれて、しばしば楽しむ何かであった。

ちょっと奇妙な写真が出ておりますが、Donald Woods Winnicott という子どもの精神分析家をしている方の写真です。彼が考え付いた、なぐり描きという squiggle game を紹介します。

24のスライドお願いします。

24. Examples 1
例 1



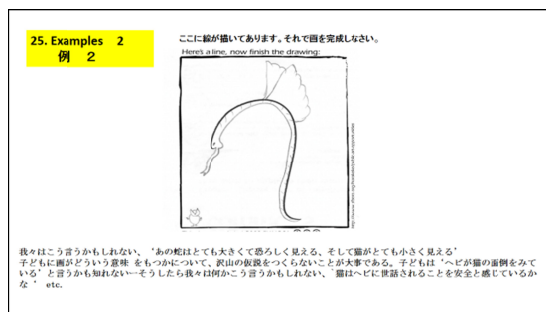
この絵で、我々は何か単純なことを言えるかも知れない。たとえば
“この人は悲しそうだけれど、どうしてだろうか？”

この squiggle というゲームのことで、たとえば、皆さんが何か線を書いて、その紙を子どもに渡します。そして、子

ものほうで、その絵を完成させるというゲームになっています。トラウマを受けた子どもたちが、こういった殴り描きのゲームを通して描く絵のなかに、子どもたちの何かを語る材料が出てくるかもしれません。子どもたちとの話のなかで、こういった遊び、若しくはお絵描きといったような馴染みのある活動のなかで何か引き出すことができるかもしれません。

たとえば、この絵ですが、「ちょっとこの人悲しそうだけど、どうしてだろう?」といったような声掛けができるかもしれません。例えば、子どもから「悲しそうなのは、お母さんがどこかに行ってしまったからだ」という答えが返ってくるかもしれません。

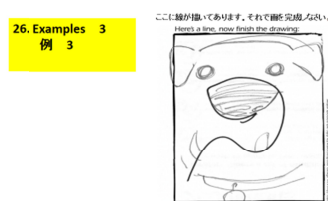
25に行きます。



こちらの絵ですが、子どもが、左下に小さな生き物を描き、その右上のほうに蛇の絵を描いています。こういった絵を見て、子どもたちがたとえば、虐待を受けた経験を示していたり、何かを語っている部分があるかもしれません。すぐに、そういった経験について触れるのではなくて「これはどういう意味なの?」といういくつかの質問を通して掘り下げていくことができます。たとえば、「この蛇は怖そうだね?」とか「どうしてこんなにこの猫ちっちゃくなっているのかな?」とかですね。ある程度子どもっぽい話をかわすかと思いますが、

我々の視点と、トラウマを受けた子どもたちの視点というのはかなり違う場合があります。例えば、子どもは「この蛇が猫のお世話をしているんだよ」と言うかも知れません。こういうテーマというのはよく見かけるものですが、この子どもにとっては、自分を傷付ける親が、一方で自分の世話をしてくれる人でもあるというのです。

26に行きます。

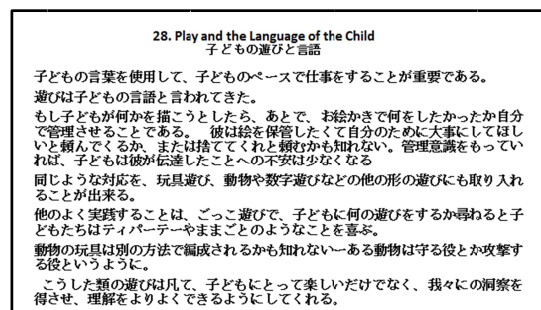


我々は「犬は何という大きな歯をもっているのだろう」と言うかも知れない。

我々は子どもがしゃべりたくないかも知れない時には、話し合うことをあまり気にする必要はない—なにかの画を描く行為はそれ自身がコミュニケーションの形で、しばしば無意識に、子どもにとってただ画を描くことが役立つのである。

子どもたちが描く絵は、時々、こういった怖い顔をしていたり、恐ろしい表情をしていたり、この犬なのですけれども、かなり歯を剥き出ししている感じになっていますね。これは、日常生活のなかでも、普通の遊びを通してとか、普通にやっていただけることと思います。皆さんがセラピストである必要はないのです。子どもたちにとっては、こういう自己表現ができること自体が大変助けになることもあります。

それでは、28に進んでいきます。

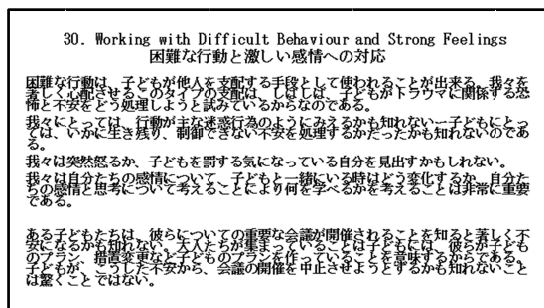


遊び自体が、子どもにとっての言語であるという考え方があります。それほど多

くのもは要しないのですが、子どもたちが遊べるような道具、ゲームとか玩具とか紙とか、ペンとか何か書けるものなどそういったものを用意して遊べるような環境を整えてあげられればと思います。子どものなかには、施設に入所する前に、本当の意味での遊びを知らない子どもたちがいます。本当にストレスを受け過ぎていて、リラックスして遊ぶことさえできない子どもたちもいます。ですから、トラウマを受けた子どもたちと向き合っていくためには、大人と一緒に子どもと遊んであげる、遊び方を教えてあげるということも大事になってきます。ゲームを一緒にしたり、お絵描きを一緒にしてあげるという経験も重要なのです。次29ですね。



Albert Einstein ですが、「遊びが研究の一番高度な形態である」という言葉を残しています。次30です。



また、重要な点としては、私たち自身の感情の動きにも注意を払うということです。我々も、時とともに気持ちが揺れ動いたり、

違う子どもと接しているときには違った感情を抱いたり、徐々に感情の変化がありますので、そこにしっかり目を向けるということも重要です。

大人同士がときにチームを組んで、施設のなかで一緒に仕事をしたり、また、里親同士の方が、ご自身の感情的なところを、どういう気持ちで子どもと接しているのかを共有していただくということが重要になってきます。

私に対応したなかで最も大変な子どものひとりに7歳の子がいたのですが、その子といると本当にみんながその子を殺したくなるような大変な子どもでした。本当にこれは極端な例だったのですけれども、周りの大人たちも、非常にこの子に対してはとても強いネガティブな感情を抱くような子どもだったの

です。その子も、あえて周りにそういう感情を起こさせるような行動ばかりを常時取っておりましたので。本当にネガティブに、その子に対して、周りの大人たちもなっていたのです。ですから、ほとんど同じような状況が1年ほど続きまして、毎日毎日それほど変化も見られない状況で、我々は、そんななかでも最善を尽くして、一緒に何とか話し合いをしながら、あまり反応しないように、できる限り世話は続けて、安全な形で、その子を見守ろうという状況が続いていました。

ここまでのところ、何かご質問のある方いらっしゃいますか？

渡邊総括園長：よろしいですか。先ほど21番のスライドで、定着性をおっしゃってました。私が今、六十何年調布学園に

いるのも「辞めないでね」と言われたことが六十何年勤務の原因になったということで、うちの職員にも定着してもらうことが大事です。辞めないで、明日もまた、子どもと一緒に過ごしてくれる職員であって欲しいです。そして、次の日もまた一緒に過ごして欲しい、そういうことをさっきおっしゃっていただいたので、大変先生のご苦労と同じような考え方で進んできてよかったなという思いを持っております。質問というより感想です。

トムリンソン：今おっしゃっていただいたポイントは、非常に重要な点だと思います。我々の仕事の中で最も重要かつ難しい点というのは、いかに職員の方に定着していただけるかです。そういった環境や、文化を作り上げて、お互いを支えていける地盤を作るということが非常に重要な仕事であると思っています。

我々のような仕事をしている組織の定着率をいかに維持するかということは、本当にどこも苦労している点だと思います。

改善の術としては、十分な時間と資源を割くということですが、どうしても時間的な制約がひとつの課題になってきます。

子どもたちの世話に充てる時間と、スタッフ同士がお互いに支え合うための、チームとしてのケアをする時間にはどうしてもお互いに相反するところがありますので。そこが時間的制約という点で、難しい点かと思えます。ただ、あくまでも、そこまで追加的に時間を割かなくても、与えられた時間のなかで、お互いにいろんなことを話し合うことができれば、かなりストレスの軽減につながるかと思えます。例えば、正

直に、オープンな形でお互いの経験を語り合うような、そういった時間が持てれば、大変お互いにとっていい関係づくりになるかと思えます。

ほかに何かございますか？この点についてでも結構ですし、ほかの点についても結構です。

男性：先ほど出た7歳の子の事例について、簡単に生い立ちと、職員の具体的な問題、あるいは、周りの子へのフォローを、どんなことをやったのかを教えていただければ。

トムリンソン：先ほどお話しした7歳の男の子は、本当に花火のように、次から次へと飛び回っているような、多動で、活動的過ぎるぐらいの、常に周りの子どもと問題を起こすようなタイプの子でもでした。その施設を逃げ出したりとか、全く落ち着いたところが見られないような子どもで、短時間ゲームしたり、遊びに終始することもあったのですが、次の瞬間には逃げ出してしまふという、全く落ち着きのない子でした。彼の生い立ちをお話すると、実の父親とは接触がないということで、母親にいろんなボーイフレンドとか、いろんな関係を持った男性がいたわけですが、母親とは、この子は、連絡は取り合っている状況でした。母親が世話をできる状況ではなかったということで、彼の安全性にも懸念が生じていたということで、施設に入所した経緯があります。最も難しい状況であったのは、子どもが母親と連絡を取り合っている状況のなかで、母親がいつもいろんな約束をしていたのですね。例えば「会いに行くよ」とか「これをあげるよ」とか、それに対し

て子どもは本当に大喜びで信じて待っていたわけなのですけれども。一切この母親は約束を守らずに、いつも子どもががっかりするような状況が続いていたのですね。母親が約束を破ると、彼は激怒していたのですが、一方では母親のことは、いい母親だと信じたい、守りたいということで、母親に直接その怒りを表現することはできなかったのですね。ということで、周りにその怒りが向いてきたという状況だったわけです。

この子に関して、正直、我々もうまく対処できたとは思っていません。非常に難しい状況のなかで、我々は、その子が、本当の自分の感情と向き合えるようになるように仕向けようとしたわけなのですけれども。つまり、母親に対する感情をちゃんと表現できるように、悲しければ、その悲しい気持ちを、怒りであれば、怒りと向き合えるような状況に持って行きたかったのですけれども残念ながら、そこには至らなかったケースになると思います。ですから、自分自身の悲しみや、怒り、抑鬱的な感情に、彼がちゃんと向き合って、戦って、ちゃんとそれを表現できるような状況にはいかなかったと言えます。

開原：殺したくなるほど大変だったということは？

トムリンソン：そうですね。私も、ここまで周りの子を怒らせるといいますか、怒りの感情を巻き起こさせるような子どもというのは、ほかに思い付かないぐらいの子だったのですけれども。大人に対しても矛先を向けて、ターゲットを絞って、怒りをか

き立てるような行動に出ることもありました。チームのメンバーも、非常にその子に対して嫌な感情を持っていたので、自分の仕事で、ここまで子どもに対して否定的な感情を持つこと自体が、本当に仕事上、この仕事に向いていないと思わせるほど大変困難な子どもだったわけなのですけれども。全員がそういう気持ちを持つほどの状況にあったということです。イギリスでは英語の表現で、よく、殺したくなるとか、首を絞めたいくなるという言い方がありますが、言葉どおりではなく、そこまでの感情を抱かせるほどの、周りの大人全員がそういう感情になるほどの子どもであったということです。ほかに、あまりそういう例はないですね。

ほかに何かありますか？

男性：日本でも同じように、そうやって職員を逆なでするとか、ほかの子を逆なでするといふ子どもが見受けられることがあります。それでも、トムリンソン先生は、その子のそういう出方に、一回一回向き合って、そういう出方はおかしいよという対応をされてきたのですか。あとは、子ども自身が大人に言われて、人と距離を置かれると、子どもにとってはショックというか、大人は大人で、心の気持ちを、「そこはおかしいよ」と伝えることを続けたほうがいいのか。大人は、そういうのを無視してしまうという対応のほうがいいのか。

トムリンソン：そういう行動を取り続けることはだめだと、受け入れられないことなのだということを伝えていくということは重要だと思います。期待値をどこに持って

いくのかということになるのですけれども、安全でない行動ですとか、そういう問題行動を起こした時には、ほかの子どもたちが不安に思うことを、もしかしたらストレスに感じるという行動である場合もあるかと思えますので、それはちゃんと行動としてコントロールできるようにしていかななくてはいけない、それはやはり伝えていくべきだと思います。これを、何度も同じことではあるのですけれども、一貫して、それをやってはいけないよと伝え続けていく。それを明らかにしていくということも重要です。あと、難しい点というのは、その施設のなかで、そういう問題行動を起こせば大人の注意を引けるのだということ植え付けられないということも重要なですね。ほかの子どもたちもそれを見ていますので、こういうふうに問題を起こせばみんなに注目してもらえるのだなと思われてしまうと困るわけなので。問題行動に報酬を与えないということも重要ですし、一方でプラスの行動に関しても、ちゃんとそれを報いるような、注目をしてあげるということも重要になってきます。子どもの感情の持って行き方に関して、たとえば、誰かを殴りたいと言葉で言うことは、実際にそれを行動に移すよりもいいわけなのです。言葉で表現できるようになるということが、我々の目的として狙っているところでもあります。ただ、子どもによっては、それを言葉として表現する、誰かに暴力をふるいたいのだという気持ちを言葉にできずに逆に行動に出てしまう子どももいますので。言葉で表現をさせてあげる、そこができるようになるということも、ひとつの目指しているところではあります。

非常に目覚ましい改善があったケースもあります。14歳の男の子でしたが、非常に体も大きくて、ある時、私にとっても怒っていた時期がありました。隣にきてこぶしをかざして、「ありんこのようにつぶしてやりたい」と言われたこともありましたが、私は、その場で動かずに、結果的には彼は私を殴ることもなかったのですけれども。非常に難しい子どもではあったのですが、逆に実際に殴るという行動に出ずに、言葉でそれを表現することができたということは、彼にとっての進歩だったわけです。

彼が子どもの頃、もっと小さいときに、自分よりも大きい人たちが、彼をどういふふうに扱ったのか、そのときの感情も言葉で表現することができるようになりました。

それでは、ここで10分間の休憩を取りたいと思います。ここまでの私の話が、皆さんが今、世話をされている子どもたちに関連性のあるお話であればと願っております。

後半部分で何かご質問等ございましたら、具体例を含めて質疑させていただければと思います。それでは、ここで一旦10分間休憩を取ります。

(10分休憩)

トムリンソン：それでは、33から再開したいと思います。

ありますので、ただ話をしてもらおう場を設けるという意味もあったわけです。

男の子で、自分は話をするのが嫌いだと言っていた子どもがいましたが、テディベアという熊の縫いぐるみを通してお話をしようということで、テディ・トークグループというのを作り、テディベアを通じて話をさせることにしましたら、それだったらいいよというグループもありました。いろんなクリエイティブなやり方が考えられると思いますので、何とか子どもたちに話をさせるために、いかに関与させるかというところで、いろんなやり方が考えられるかだと思います。それぞれの子どもがどういう発達段階にあるのかということも考慮する必要があります。また、子どもたちをグループのなかに配置するとき、本当に正しいグループ構成になっているのかどうか、適材適所になっているのかどうかを考える必要があります。例えば、子どもが機能的には3歳程度の幼児の機能しか果たしていないのに、ほかのグループのメンバーはより発達段階が進んでいる場合ですね。本当にこの構成でいいのかということをお問いたださなければなりません。それぞれの子どもの発達段階において、どのステージにあるのかという、その子の個々の評価をしていかななくてはいけないわけです。コミュニケーションに関して、それぞれの子どもと話をするなかで、いろんなレベルのコミュニケーションがあるので、その子とはどういうふうにコミュニケーションを取るべきなのかと考えていかななくてはいけないわけです。子どもたちで、言葉は発していますが、たとえばテレビを見るとか、時間はそこにいるんな話で埋まっているということがあ

かもしれません。本当に自分たちのことを語っているかということ、そうではないのです。自分たちの感情は何も表現していなかったり、何も実質的なコミュニケーションが取られていないという場合もあるかと思っています。我々は、子どもたちにはもちろん伝えなかったのですが、子どもたちのスコアを付けていたことがありました。Cという評価であれば、単にそういう言葉は交わす程度であると。Bであれば、重要なことであれば話をするけれども、自分たちの感情については話をしないというレベルです。Aであれば、重要な話もするし、自分たちの感情についても表現するというのが、Aレベルということだったのです。子どもには知らせずに、職員の間でそういう情報を共有しました。それをモニタリングして、子どもたちのコミュニケーションが、半年ごとにどういうふうに変ってきたのかということを見ていくこともできました。それを測定していくこと、位置付けていくことが重要だと思いますので、子どもたちをよく観察して、何とかコミュニケーションの改善を図り、コミュニケーションの質を高めるという意味で、グループのなかでのコミュニケーションのやり方を考えていくことをやりました。

ここまでのところで、ご質問は？

女性：6人のグループホームで仕事をしているのですが、小学生が人の感情を思いやる、状況を読むというのが非常に苦手な小学生集団で、日常的にトラブルやいざこざが多くなっています。そこを改善したくて、先ほどから話題になっているトーキング・グループ、グループで話をするのを10月

からやっています。目的は、感情を気遣うことだったり、評価をするということを体得して欲しいということだったりですが、現段階では、一日何をやって楽しかった？とか、自分の経験を、こういうこととして楽しかったということ、30分ぐらい時間を使いながら、大人と子どもで話をするということをしていきます。今の子どもたちの現状では、その取り組みがやっとなのです。しばらく大人で毎晩そういう取り組みをしてみて、少し子どもの中で変化が見られたり、人の気持ちを考えたりできるような雰囲気が出てきたら、例えば、セカンド・ステップのような、先ほどのスクリブルのように、「この子は悲しそうだね」とか「悲しそうな子どもを見たら、どういふ声掛けをしたらいいかね」ということを、ゆくゆくはやりたいという話をしているところです。子どもたちの、どのような状況の変化を見て、次の段階の話し合いに入れたいのかということをご質問したいのですが。

トムリンソン先生：難しいご質問で、うまくお答えできるかわからないですが。やはり、非常にネガティブな経験をした子どもたちというのは、事実として、非常に思いやりの気持ちを持ったり、感情移入をほかの人たちにするとというのが非常に難しいということもわかっているのです。特に、小さい頃にそういう経験をした子どもが、早期に、いきなり思いやりの感情を持ったり、感情移入ができる子どもになるというのは難しいと思います。これまで、文献でも目にしたことがありますけれども、こういう、ほかの人の感情を理解して、感情移入がで

きるような性質というのは、大人になって健康的な活動をするうえでも、最も重要な資質の一つであるということが書かれています。攻撃的・敵対的な人物になるのではなくて、ちゃんと社会行動をしていくために非常に重要な資質であるということを目にしたことがあります。子どもたちが、感情移入を経験しなければ、それがどういうものなのかということ、体得できませんので。子どもたちにとって、私たちが思いやりを示してあげる、その子の気持ちに立って、何か行動に移してあげるということで、徐々に子どもたちもそういった気持ちを体得していくのだと思います。先ほど、そういったトーキング・グループの試みをされているというお話だったのですが、子どもたちに重要な話をしてもらうことが難しいと感じられることもあるかと思います。けれども安全な話題で、そういったグループを続けていければ、6か月とか、もっと長くかかってしまうかもしれませんが、徐々に重要な話にも、子どもたちが口を開いてくるかもしれないと思います。

先ほどおしゃっていただけ質問のなかの、次のステップ、セカンド・ステップというのはどういう意味でおっしゃっているのでしょうか。

関原：そういう名前のパッケージがあるのです。米国のCFC（Committee For Children）の日本支部が発行している米国の教育プログラムです。ご質問の方は、このセカンド・ステップを応用してトーキング・グループをやっておられるのですか？

女性：やっていないです。そこを目指した

いのですが、まだそういう段階じゃないので、楽しいお話をみんなで聞こうね、というところですよ。

トムリンソン：今、お話のあった「セカンド・ステップ」を存じ上げないのですが、いずれにしても、子どもがあるレベルから次のレベルに進んで行くところを手助けするというので、何とか前に進んで欲しいというところのサポートについてのお話かと思えます。そういう意味では忍耐強く、子どもによっては、そう簡単にセカンド・ステップまで進むことができない子どもたちもいるかと思えますので。そこをいかに可能にしていくのかというところでは、忍耐強く待つ姿勢というのが非常に重要だと思いますし、次のステージにいつ行くことができるのかということをしつくり見守ってあげることが重要かと思えます。

先ほど、思いやりの気持ちといいますが、感情移入するという能力が、子どもたちとのやりとりのなかでも最も重要な資質になるかと思えますので。そういう意味で、本当に子どもの気持ちがわかるということが、その必要性についてまず認識をする必要がありますし、子どもがどういう気持ちでいるのかということを知ることが必要になってきます。

親としては、子どもについて、いろいろと自然に気付きがあるかと思えます。たとえば2歳の子どもに対して、それから、10歳の子どもに対して、当然親の期待値も違うかと思えます。私も自分の息子が3歳の頃のことを思い出して、小さなハムスターを飼っていたのですけれども、階段を上がって行って、浴室の水を貯めて、ハムス

ターを泳がせようとしていたことがありました。3歳だったので、そこまで心配はしなかったのですけれども、私も「あまりハムスターは泳ぐのが好きじゃないと思うよ」という形で説明をしましたが、これがもし10歳だったら、ちょっと心配しなくてはいけない状況かもしれません。ですから、年齢によっても違うとらえ方がありますし、そのところをしっかりと見ていかなければなりません。子どもがどういうレベルにあって、どういう考えを持って、どういう行動に出ているのか、というところをしっかりと評価して、測定していくということが重要になってきます。そこで、どの程度の進捗があるのか、どのくらい進歩しているのかということをしつくり把握することができるかと思えます。

先ほどのお話と結び付いてくるのですが、スタッフの方々の定着についてもお話が出ましたが、やはり、職員の方、ケアをされる方々がいかに思いやりを持って、お互いの感情を押し量ることができるか、子どもに対しても、それを示すことができれば、子ども自体も感情移入をする能力をさらに高めていくことができ、経験としてできるかと思えますし、皆さんの感情についても、理解を深めることができるかと思えます。また、同僚の方同士の思いやりといいますが、お互いを察してケアをし合うということも、職員の方の定着率の向上にもつながってくるかと思えますので、一連の話がそれぞれつながっているかと思えます。

職員の方のケアというのも非常に重要になってくるかと思えますし、John Bowlbyの言葉だと思いますが、子どもを大事にするには、子どもの親を大事にしなくてははい

けないということにも通じると思います。

ここにいらっしゃる方のほとんどは、実際に施設で職員としてケアをされている方、若しくは里親として子どもたちのお世話をされている方がほとんどかと思いますが、皆さん、あまりこの仕事の重要性を十分に認識されていないこともあるかと思います。しかし、親として治療する、therapeuticな結果をもたらすということは、非常に重要な仕事の一環であります。ですから、こういうケアをしている施設の職員の方は、本当に重要な仕事をしているのだということをごきちんとして認知させる必要があると思います。

それでは、次に、セラピー、それから、ライフ・ストーリー・ワークについて少し触れていきます。

ここにいらっしゃる方のなかで、セラピストのところに子どもが通っているという方がおられますか？（多数挙手）ということ、結構一般的に子どもがセラピーを受けている状況があるということだと思います。もちろん、子どもたちの年齢に合わせて、セラピーのテクニックも変わってくるかと思いますが、お話をすると、プレイセラピーとか、箱庭療法とかがあるかと思いますが、子どもたちに、セラピーを受けさせるかどうかという意思決定は、回復のためにセラピーが必要かどうかということになりますが、子どもにとっては、治療的ケアもセラピーもライフ・ストーリー・ワークも大変役に立つものであることがあります。やはり、それぞれの子どもと、どういうふうに対応していくのかという、個々のケースとして評価していくことが重要になるかと思えますし、セラピー又はライフ・ストーリー

ー・ワークということで、子どもにとっては大変効果的な場合もあります。ライフ・ストーリー・ワークは、自分自身の生い立ちに関して非常に混乱している子どもにとっては大変役に立つ手法です。施設に入所する子どもたちのなかには、親元から離れて入所したケースもあれば、いろいろな変遷を経て、複雑な環境のなかで、いろいろなところを辿って最終的に入所したケースと様々だと思います。

ここで、一点、resilienceの話をしたいのですが、いかに子どもの回復力を高めていくことができるのかというポイントについて、話したいと思います。

（以下のスライドは資料「エビデンス情報と成果にもついた里親のケアモデル」から）

17. Resilience 回復力

絶えず側にいて心をくわしてくれる大人の存在は、人生早期に心身を害する状況に屈服していたであろう子どもたちに、きわめて元気づける影響をもたらす。レジリエンスという考え方は、子どもの発達や、発達に混乱を伴った子どもたちがどう回復するかの理解の中心となっている。

社会的養護を受けるまでに多くの子どもたちは無数の危険因子に曝されている。子どものレジリエンスに基づく仕事は、子どもが持つ力と肯定的な面の確認に焦点をあてる。

ギリガン (Gilligan 2000) は、レジリエンスの3つの源を、安全基地、自尊心、自己治癒力と特定している。

教育の成功は、子どもたちに逆境の体験を克服し、レジリエンスを強めるという最も明確な方法のひとつとなることが出来る。独立した生活に移行する前の教育の成功は、明確な成果と相関することが明らかにされている。

18. The following key points have been found to promote resilience
下記の要点がレジリエンスを強める

- 強力な社会的支援ネットワーク
- 少なくとも一人の無条件で支えてくれる親か親の代理の存在
- 確実な学校出席 - 子どもへの教育の達成を支えることは、長期にわたるレジリエンスと確実な成果をもたらす上に大重要
- 克服する気持ちと自らの努力が強いを生み出すという信念
- 様々な課外活動の参加
- 破壊的な影響ばかりでなく有益なことも認識されるように、逆境を積み替える能力
- 他人を助けることで“強いが生じる”能力と機会
- 挑戦的な状況からは避けるより、むしろうまく処理する力が育つように支える

そうした活動には下記のことが含まれる

- 動物の世話をする
- スポーツや他の余暇活動
- 表現と創作芸術
- アルバイトやボランティア活動

社会的養護の活動は、その中に含まれる特別な技能だけでなく人間関係の能力を築くのに役立つ。そうした活動は、正常な生活をもたらすので、アンゲリン (Anglin 2002) は社会的養護下にある子どもたちに大重要であることを見込んでいる。

先ほども、コミュニケーションの重要性についてお話しましたが、よりコミュニケーションを円滑に取ることができれば、それは回復力の向上にもつながるといことで、うまくコミュニケーションを取ることができれば、それだけ問題も少なく

なってくるということが言えます。

また、回復力を高めるもうひとつのやり方として、先ほども申し上げたように、ゲームをしたり、得意なことをやるとか、上手にできるとか、これをするのは好きとか、そういった意味でのアイデンティティーを確立することができれば、こちらも回復力向上につながっていきます。

また、もうひとつ、resilience という意味では、仲間同士、子どもたちのなかでも仲良くできるという、そういう関係構築ができれば、こちらも回復につながってきます。

ライフ・ストーリー・ワークも、子どもの回復という意味で非常に重要な役割を果たしておりますし、子ども自身のアイデンティティー、それから生き立ちを追っていくということで、そういった意味での回復力の向上につながってきます。ライフ・ストーリー・ワークということで、毎日の日常生活のなかで、本当に些細なことでも、子どもとのお話のなかで、過去の生き立ちに触れる機会があるかもしれません。たとえば、昔どこに住んでいた？とか、そういう話が出たときに、更に一步踏み込んでいろんな話を引き出していくチャンスが出て来るかもしれません。

以前、伺ったことで、日本では施設職員や里親は、子どもの生き立ちについての情報を殆ど得ることができないこと、子どもがどういう経緯で入って来たのかというくわしい情報がわからない状況が多いというお話でしたが、これをどうやって改善すればいいのはわかりませんが、ライフ・ストーリー・ワークというのは、子どものこれまでの歴史について知る過程の中でそう

いった情報を知るひとつのきっかけにはなると思います。

これについて、何かご質問ございますか？

女性：さっきの項目のところに戻ってしまうのですが、先ほどのグループで話をするというところです。私たちのグループホームは6人の構成ですが、本当になかなか人への思いやりとか共感を持ちづらい集団で、本当に一人ひとりが自分のことを見て欲しいという気持ちがまだ、年齢的なところと生き立ちから強いのですが、そういう集団でも、まずは二者間の、職員との愛着を築くことを優先したほうがいいのか、それとも、やはりグループで話し合うということが重要なのか、教えていただければと思います。

トムリンソン：非常に興味深いご質問いただきまして、ありがとうございます。やはり、子どもたちがまだ、あまり思いやりの気持ちとか感情移入をする能力がない場合に、先ほどおっしゃったように、個々の、自分個人を注目をして欲しいというニーズがまだあるということだと思えます。やはり、普通の子どもでも、小さいときは、一対一で常にアテンションがもらえる、注意を傾けてもらえるという状況から出発しますので。そういう意味では、グループとして取り組むのはチャレンジであるかと思えます。トラウマを負って施設に入所してくる子どもたちのほとんどは、まず、大人との間での愛着形成といったものがなくなってきます。その後のいかなる健康的な発達というの、まずは、そういっ

た愛着がベースにあって初めて形成されるものになると思います。ですから、まず最初は、子どもたちの個々の理解を深めて、早期の段階の、まだ発達の初期の段階であるということであれば、一対一の関係でのワークを多く取り入れて、若干のグループワークみたいなものを取りこんでいくことです。徐々に発達の進歩が見られて、徐々に改善されてきたという段階で、よりグループワークのほうの割合を増やしていったほうがよろしいかと思います。

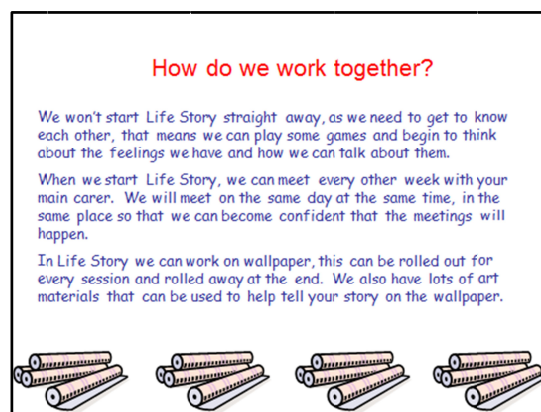
いろいろなご質問を受けておりますが、本当に皆さん、ご自身のお仕事に真摯に取り組んでらっしゃるなということが伝わってきますし、一方で現実が複雑な状況にあるということもお察しいたします。

コミュニケーションのお話も先ほどから出てきておりますけれども、こういったいろいろなご質問を受けて、ディスカッションに関しても、いかにコミュニケーションを取ることが重要かということも先ほどからお話ししているとおりなのですが、解決策を見つけるためには、大人同士のコミュニケーションというのが必須です。

ライフ・ストーリー・ワークについては、以上でよろしいでしょうか？

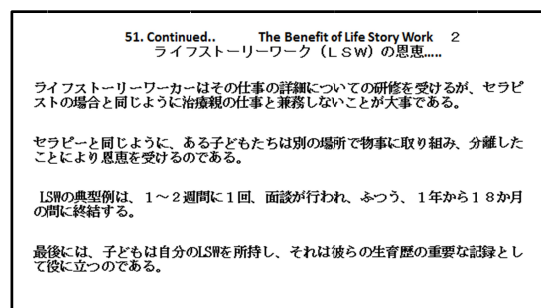
開原：今、講義で使われたスライドのなかで、resilience に関係したものは、皆さんにお配りした資料にはなかったものです。それから、ライフ・ストーリー・ワークに関しては、去年、関連した資料をお配りしました。そのなかの重点を今回もう一度お話しくさいましたが、あと、英語のスライドがありますので補足していただきます。

ライフ・ストーリー・ワークで、ウォールペーパーという、壁紙にいろいろなことを書いたり、貼り付けるというお話を昨年講義していただきましたが、壁紙のイメージがどんなものかということで用意いたしました。



トムリンソン：ご質問、ございますか？

女性：ライフ・ストーリー・ワークということについてですが、仕事のなかで、子どもの生い立ちの振り返りという形で、私たちができる範囲で取り組むということ、それなりにやっているのですが、ライフ・ストーリー・ワークを行う人は、51番のなかで、セラピストの場合と同じように、治療親の仕事とは兼務しないことが大事であるという一文がありますね。

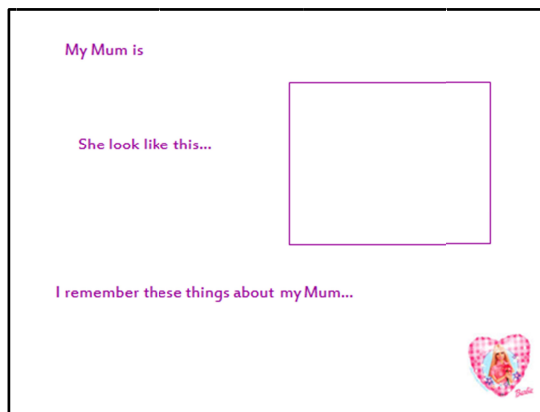


セラピーを行う人については、今の日本の養護施設のなかでは専門職として各施設に配置されたり、業界の中で専門家として

認識されるようになってきているのですが。ライフ・ストーリー・ワークを行う人という専門家は日本では、まだ認識されていないし、そういう仕事として確立されていないという実態があります。そういうなかで兼務をしないということが大事であるということは今の日本の養護の現状と重ならないので、どう認識をしていけばいいのか。たとえば、治療親が取り組むというライフ・ストーリー・ワークの取り組み方しか、現実的にはできないので、どうしたらいいか、ということを経験したいです。

トムリンソン：自らの生い立ちに関して、若しくはアイデンティティーとか、自分の家族はどこにいるのだろうかということに関して、子ども自身が混乱しているような場合、そんなに大袈裟にしなくても、本当に些細なことでも、子どもたちと、ケアをする過程のなかでいろいろと話し合っていくということは、できることだと思います。ただ、それと、ライフ・ストーリー・ワークというのは別でして、セラピーの形態ということでのライフ・ストーリー・ワークというのが確立されているのです。これは、やはり子どもにもっと踏み込んだ形で深く関わって作業していくわけなのです。子どもによっては、ライフ・ストーリー・ワークのような深いレベルの話をするということ、往々にして自分の母親についての話を、今現在、世話をしてくれている方と話をするのに抵抗があるかもしれないのです。言いたくない、言い辛いことを話さなくてはいけない、そこまで踏み込んだ話を、今、毎日面倒を見てくれている、世話をしてくれている方に話すというのは、非常に難し

い状況なのです。母親に相反することを言わなくてはいけないという、そういった経験を踏まえると、やはり、外部の方で、そういうセラピストのような役割を果たせる方が、施設外の方が望ましいかと思います。

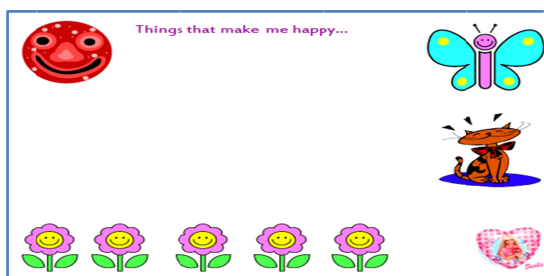


このスライドは、どういう情報が入ってくるかという例ですが、例えば、「自分のお母さんは？」ということ、まず、名前が入りますね。写真があれば、写真。子どもがお母さんの絵を描くこともあると思いますし、子どもが記憶にある内容、どういことを覚えているのかという内容がここに入ってきます。

父親についても同じものがあります。

次のスライドは、子どもが何を好きだとか、何をしているときが楽しいのか、というシンプルな問いかけに対する、興味深い、興味を持てるような内容をこちらのほうに書いてもらえばいいのですけれども。





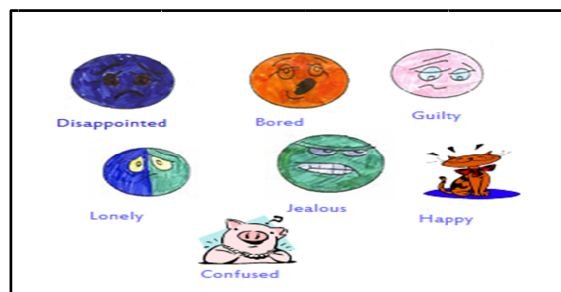
こうしたことは、ときに難しい作業になるかもしれませんが、往々にして楽しめるような作業だと思います。ただ、ライフ・ストーリー・ワークとなると、もっと詳細にわたって、踏み込んだ作業になってきますので、ライフ・ストーリー・ワークを担当する方は、本当に子どもの生い立ちに関しても熟知している必要があります。たとえば、母親について、子どもが語る内容が、現実とかけ離れているものになっている可能性もあります。

この程度の情報であれば、職員の方、若しくはケアをされている方が取り組むことは可能だと思うのですが、更に一步踏み込んだライフ・ストーリー・ワークになりますと、やはり、もっと深いところに入って行きますので、現実と、子どもが描写している内容とに違いがある場合、ギャップをいかに埋めていくことができるのか、そこでサポートするという役割もあります。



こちらは、どんな家に住んでいたのか、

住んでいたのはどういう人だったのか、若しくは兄弟がいたり、祖父母と同居していたかもしれません。Richard Rose という方は、これを自分についての本(all about me)ということで、自分自身の理解を深めるための本を作り上げるというやり方をとっています。こういうやりとりを通じて、いかにその子どもが自分の生い立ちについて混乱しているのかということが、段々わかってきます。このワーク自体は1年から1年半かかると思いますが、ある程度正確な生い立ちの理解をしているかどうか、家族についての成り立ちですとか、そういったところの情報に関しても、どこが欠落しているのかどこまで正確に理解をしているのかということ把握していくことができます。



こちらも、非常にシンプルなやり方で、子どもたちが抱えている感情を表すという手段になりますけれども、言葉で書いても結

構ですし、顔の表情で、悲しそうだったり、怒っていたりということによって表現することもできますけれども、これによって、自らの感情を認識することができるようになっていきますし、非常に、そういう意味では容易なやり方ではあると思います。

こちらに書かれている内容は、子どもたちがいかに安全な場所にいるのかということの思い起こさせてくれるような内容になっておりまして、誰も自分を傷付ける人はいないとか、何か自分が悪いことをしようとすると、ちゃんとそれを大人が止めてくれるというような内容ですね。

今お見せした内容は、ライフ・ストーリー・ワークそのものではなくて、入口にあるところで、ライフ・ストーリー・ワークを始める前の段階で、世話をされている方でもできるアイデアとして、ご紹介しているわけで、前段階として、より今後への理解を深めるものです。本当に子どもにライフ・ストーリー・ワークが必要かどうかを判断するうえでの材料にもなります。

ほかに何かご質問はございますか？

男性：ライフ・ストーリー・ワークについてですが、今のことにも関わって説明をされたのですが、自分自身の理解を深めるためということの入口にあるということですが、それと、先ほどの文書の中に、1年から1年半ぐらいかけて、ライフ・ストーリー・ワークを行っていくということが書かれています。僕がいる学園では、子どもが入所理由を知りたいということであれば、職員で確認を取って、この子についてはこの程度伝えようということ、伝えていくということ、卒園までに、その子が望む

のであれば、話をしていこうということで、割と短時間で伝えていくという形を取っているのですが、ライフ・ストーリー・ワークについて、具体的な項目というか、中身のところで、どういったことを伝えていくのか、そのあたり、もう少しお聞きできればと思うのですが。学園では、その子の入所にあたって、子どもは悪くないということ、親の状況もあるのですが、社会に巣立っていくことを考えていくと、親の育った環境とか、そのあたりのことを割と伝えて、親を悪く言わないということ、心掛けて伝えていくようにしています。

トムリンソン：非常に大事なポイントだと思います。子どもの親に関して、あまり判断を下すような、批判的なことは言わないということも重要だと思います。

ライフ・ストーリー・ワークに関して、3つのレベルがありまして、実際に子どもに何が起こったのかという生い立ちの過程の事実ですね。2つ目のレベルというのが、子どもがその事実関係をどのように理解しているのかということで、施設に入所したことはわかっているけれども、どうして入所に至ったのかという理由のところ、現実とは違う理解をしている場合があります。先ほどおっしゃったように、自らを責めているという、自分が悪くて入所に至ったのだと理解している子どももいるかと思いますが。ライフ・ストーリー・ワークというのは、非常に複雑で時間のかかる作業ではありますが、子どもに対して事実を知ってもらうだけではなく、その事実に至った経緯の中で、どうしてそういう事実が起こって

しまったのかという理由も理解してもらおうということを心掛けておりますし、その事象に対する子ども自身の感情についても、できるだけ理解するように努めています。

まず、健康的に大人として成長してもらうために、事実として何が起こったのかということを知る必要がありますし、その理由についても把握する必要がありますし、それに対する感情ともうまく向き合っていく必要があります。例えば、5歳のときにこういうことが起こって、その理由はこうだったと。それについての理解は正しかったとしても、そのときにどういう感情、どういう気持ちになったのかということについては、語れない子どもが多いですね。「そんなものは気にしない」とか「わからない」とか言ってしまうかもしれないのですが、実際そのときに抱いた感情というのは、当然子どもは気にしているわけです。ただ、それを口に出すことができない、表現することができないということなのですね。

先ほど、手を挙げられていた方、どうぞ。

女性：コミュニケーションのところになるのですが。今現在、担当している子どもの中に、12歳の女の子がいます。11歳まではアメリカで生活をしていたので、言語としては英語を使っていました。今現在は日本にいますので、日本語を習得して、学校生活などを送っているのですが、言葉の壁だとか、日本語の微妙なニュアンスだとか、日本の文化とか、そういったものが、なかなか理解できないので、対人関係のトラブルなどがすごく多いです。本人自体がかなりひどい虐待を受けてきたこともあって、いろんなことに対して、虚言が多いですし、

うまく伝えられないことでパニックになってしまったりします。あと、自分の非を素直に認められない、そういったことでのトラブルが絶えないので、これから中学生になって思春期に入るということもあって、どういうふうに、こちらも対応したり、支援していったらいいのかというところが日々職員の間で話になるのです。生い立ちの整理はもちろんしてあげなければということもありますし、まずは、その日々のコミュニケーションというか、そういうところをうまくできると、彼女自身も生きづらくないのかな、と思うのですが、その辺をアドバイスいただけたらと思います。

トムリンソン：今伺った状況というのは非常に難しい状況だと思います。お子さんも虐待を受けてトラウマを受けている以外にも、外国で生活しなくてはいけないという大変な状況にあるかと思います。これは、違う国に住むのは、大人でも大変なことですから。あと、周囲の馴染みのない環境で、周りの人にも理解してもらいづらい状況と、言語の微妙なニュアンスというのは、確かに先ほどおっしゃったようにあるかと思いますので、様々な難しい状況が絡み合っていると思います。そこまで難しい状況のお子さんの場合は、先ほど私が申し上げたように、サバイバル、まず、そこで位置付けてあげることがひとつの大きな目標になります。また、アメリカから来られたということで、更に問題が複雑化している部分もあるかと思いますが、ひとつの改善策としてご提案したいのは、たとえば、アメリカという馴染みのある文化の方を、アメリカ人の方に関与してもらおうとか、彼女

がよく馴染んでいるルーツに近いところで楽しめるようなことがあれば、それを取り入れてあげるとかですね、そういう改善策も考えられるかと思います。

女性：本人が、アメリカの記憶をなくしたい、アメリカで父からの虐待がひどかったので、忘れたい。できれば、日本でも、このまま両親から離れて生活をしたいと思っているので、英語もしゃべりたがらない。だけど、日本語を一生懸命やるけれども、今すごく難しい。でも、1年でよく習得したなと思うのですけれども。

トムリンソン：今のお話を伺うと、非常にお子さんのことを尊重されて、その子を守るということで、非常に思いやりを持って感情移入させながら、適切な行動を取っておられることがよくわかります。やはり、アメリカと虐待されたという経験が結び付いてしまっているということですので。その状況を、本当に適切に判断されて、うまく対処されているように聞こえます。ライフ・ストーリー・ワークのなかでも、最も重要な点のひとつとして、子どもと日常生活を一緒にするなかでのマイナスの感情とプラスの感情、また、マイナスの経験とプラスの経験というのをうまくバランスを取っていくということもひとつ挙げられます。虐待されていた子どもであっても、たとえば、両親に関して何らかのいい記憶、思い出があるかもしれないと思います。その女の子が、将来本当に自分の安全を感じることができるときには、何かアメリカについて、若しくはアメリカ人についても、いい思い出、記憶がよみがえってくることもあ

るかと思います。

そろそろ終わりの時間が近づいてきたのですが――。

それでは、長い時間、皆さまご清聴いただきまして、ありがとうございました。いろいろな考えを共有いただき、積極的にディスカッションに参加していただいて、本当に意義深い時間を過ごすことができました。3時間の長丁場になりましたけれども、ご参加いただきまして、ありがとうございました。

(拍手)

本当にありがとうございます。来年、もしこちらに伺う機会がありましたら、あと1年、皆さんに survive していただいて、またお目にかかれることを願っております。ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。研修は、これで閉めさせていただきますが、午後も滞在していただけるということで、いろいろ企画がありますので、学習室のほうで意見交換等の時間を設けさせていただきたいと思いますので、奮ってご参加ください。会の最後となりますので、調布学園園長遠田より挨拶いただきたいと思います。

遠田：皆さん、今日は、お忙しい時間のなか、午前中3時間という時間を利用していただいて、パトリック・トムリンソン先生の研修をいただきました。まず、始めに、今回2年目になりますけれども、こういうチャンスをいただきました開原先生に感謝をさせていただきたいと思います。また、とてもわかりやすい通訳をしていただきました辻さん、ありがとうございます。(拍手)

私どもも、日々本当にサバイバルでありまして、今の苦勞が先の楽しみという思いを日々抱きつつ養育をしておりますけれども、本当に今日は多くの関係機関の方々にお見えいただいて、重要な意見交換ができたのではないかと考えています。今日のお話のなかで、本当に生き残ること、長く働き続けることと、その根底を支えるコミュニケーションの重要性ということをととも共感できる、また、重要なアドバイスとメッセージをいただきました。本当に、いろいろと今日お話を伺えたことにありがたく思っています。

パトリック・トムリンソン先生には、私も英語は下手なので、拍手で感謝を表したいと思います。皆さん、一緒にお願いいたします。どうもありがとうございます。
(拍手)

司会:これで会を閉じさせていただきます。
ありがとうございました。

〈以上終了〉

